

平成21年度 大学院工芸科学研究科博士前期課程 学位記授与式
学長告辞

今日、ここに、博士前期課程を無事終えられ、学位授与式に臨まれた四一二名の皆さんに対し、心からお祝いを述べたいと思います。

また、皆さんの勉学・研究を支えてくれた、ご家族を始めとする多くの方々に対し、深く敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和六十三年に工芸科学研究科を設置し、これまでに、五千九百四十三名の修士号取得者を生み出し、多くの知的財産を蓄積してまいりました。

本日は、皆さんに、第五九四四号から第六三五五号までの修士の学位を授与させていただきました。

皆さんは、学部卒業の後、専門を深めるというそれぞれの目的をもって大学院博士前期課程に進学されました。

そして、二年間の教育課程で研鑽を積み、輝かしい成果を挙げ、本日、目出度く学位授与式を迎えられました。

皆さんの中には直ぐに社会にでる人もいるでしょうし、これから博士後期課程でさらに研究に従事する人もいるでしょう。

あるいは、祖国に帰り、祖国の発展のために働く人もいます。

それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと信じています。

その際、本学の博士前期課程で研鑽し、習得した成果を十分に活かし、人生の新しい段階を切り開くよう一層奮励努力されることを祈って止みません。

皆さんは、今日を境として新たな希望に向かって進まれることになりますが、皆さんを待ち受ける社会は決して明るいものばかりではありません。

特に、地球環境の悪化、温暖化の問題は人類の存亡にかかわる課題として、我々に迫っております。

これからの社会を担う皆さんは、何らかの形でこの地球環境の課題と向き合わなければならないと思います。

地球環境や地球資源を守っていこうという機運の世界的高まりの中で、問題の解決を導く言葉としてThink globally and act locally という言葉があります。

「世界的規模で物事を考え、各地域で、それぞれが置かれている立場で行動する」ということです。

地球温暖化に対しては、世界的規模で環境のことを考えて、各国、企業、地方自治体、各人で地球温暖化防止の取り組みをすべきであるという考え方の重要性が指摘されており、「Think globally」ということは、世界に定着しています。

しかし、「act locally」ということは、二〇〇九年一二月開催のCOP十五(国連気候変動枠組み条約締約国会議)の会議に見られましたように、現実には非常に難しいことです。

COP十五の会議では、総論賛成、各論反対または各論は先送りということが起こりました。

そこで今日は、「act locally」がなぜ難しいのかということについてお話したいと思います。

地球環境の保全の問題は、今日的な課題のように考えられていますが、実は、十九世紀末に始まった課題なのです。

十九世紀末から二十世紀初頭における産業革命は、技術革命を起こし、人々の活動範囲を飛躍的に広げ、大きな利便性をもたらし、経済的な豊かさをもたらしました。

しかし他方では、生活環境や社会環境を大きく悪化させました。

産業革命によって生活環境が悪化していく社会状況の中、スコットランド生まれの生物学者で、後に都市計画や教育の分野で活躍した、Sir Patrick Geddes は、一九一五年にその著書「Cities in Evolution」の中で、次のように主張しております。

表面的な美しさよりも人々の生活と資源エネルギーの保全を考え、調和ある発展、歴史的・宗教的建造物の保全を、金銭的な豊かさではなく居住民の幸福、健康、快適さを促進し、将来の成長を必要に応じてコントロールするものとして都市計画を考えるべきである。それぞれの生活基盤である地域は、健全な全体環境との適正な関係の中でのみ、活かされるのである。

このような Geddes の主張は、残念ながら百年たった今でも通用するものであり、その後の世界は地球環境悪化の傾向に歯止めをかけることが出来なかったのです。

世界の都市環境はさらに悪化の傾向をたどり、地球環境の悪化と資源の枯渇をこれ以上看過できない状況に至っています。

しかも、このように差し迫った状況のなかでも、課題解決のための act locally の実践は困難なのです。

二〇〇九年十二月の COP 十五においては、政治合意文書「コペンハーゲン合意」を採択できず、承認にとどめ、各国の温室効果ガス排出削減義務づけの合意は得られませんでした。

このような事態は何故おこるのでしょうか？

act locally の実践はなぜ困難なのでしょうか？

その一つは、責任の分散がおこるためであると考えられます。

人間が社会的生活をしているとき、しばしば緊急事態に巻き込まれることがあります。そのような緊急事態では、他の人からの手助け・援助が必要であります。そして、他者から適切な援助があれば、大きな災難を避けることができます。

しかし、現実には、緊急事態において、他者を援助する行動が抑制されることがしばしば起こります。

心理学者の Darley & Latane

(ダーリーとラタネ)は、一九六八年に、「他の傍観者の存在」によって、援助介入の抑制がおこることを明らかにしています。

彼らは、ディスカッションをしている間に、ある人が発作を起こすという緊急事態で、その人を助けるという行動が他の人の存在に強く影響されることを実験的に明らかにしました。

実験では、自分以外に誰もいないと認識した場合には、八十五%の人が援助行動をしたのに対し、他にもう一人いると認識すると六十二%、他に四名いると認識すると三十一%というふうに、他に人がいるという認識が数の増加に従って援助行動を抑制してしまうという結果が示されました。

すなわち、何人の人がいるかという人数に応じて援助行動が抑制されるという性質があったのです。

彼らは、その理由を人数が多くなるにしたがって、援助行動に対する責任感が小さく感じられたためである、すなわち「援助の責任分散」が起こるためであると考えました。

Darley & Latane (ダーリーとラタネ)は、他に、もう一つ、責任の分散に付随する重要

な性質を明らかにしています。

それは、他の傍観者が援助に対して消極的である場合には、さらに援助行動が抑制されてしまうという性質です。

多数の人がいれば、責任の分散によって援助行動を起こそうとする動機が小さくなり、その結果、援助行動を起こす人が少なくなるのです。さらに援助行動を起さない人が多くなれば、援助行動を起こす人がさらに少なくなるのです。他の傍観者の存在によって、抑制効果は二重に働くのです。

都市化によって人々が非人間化し、冷淡で無関心になったとよく言われますが、Darley & Latane (ダーリーとラタネ)の考えに従えば、そうではなく、責任の分散の結果として、非人間的、あるいは冷淡で無関心な人が行なう行動と類似の行動をするのです。

多くの人が存在するという認識が、このような非人間的で冷淡な行動をする結果になるのです。

この責任の分散が、act locally の実践を阻むのです。

act locally の趣旨とは、Darley & Latane の実験状況で考えれば、自分以外に他の人がいないと認識する場合と同じ行動をすることです。

他の人が、他の地域が、他の国があるという認識があると、責任の分散を引き起こし、自らの行動の実践を抑制してしまうのです。

これが、百年以上かかっても、地球環境の保全が達成できない理由の一つとして考えられます。

このことを如何に克服してゆくかが、これから人類に課せられた課題であります。

人間には、残念ながら、多数の人の存在によって、責任の分散が起こるという性質があります。

明日からまた新たな挑戦を始めることになる皆さんには、理性によって、このような集団のもつ負の性質を克服していただき、地球環境の課題を自分の問題として考えていただきたいと思います。

そして、本学で学んだことをそれぞれの立場でさらに深め、新たなパラダイムを構築して、

この人類の負の遺産ともいべき地球環境の問題を解決していただきたいと思います。

皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞と致します。

本日は、修士の学位取得、まことにおめでとうございます。

平成二十二年三月二十五日

京都工芸繊維学長

江島 義道